

先日、大腸ポリープの摘出手術を自衛隊富士病院で行った。7月末の検査で、「顔付きの良くない」（主治医曰く）さほど大きい訳ではないポリープが60cm程奥に見つかり、3ヶ月の経過観察の後、今回の摘出になった次第である。

富士病院は昭和51年3月に富士学校正門横に自衛隊富士地区病院として開院され、昭和63年4月に自衛隊富士病院に改編された。本院は、富士地区（富士駐屯地、滝ヶ原駐屯地、板妻駐屯地、駒門駐屯地並びに北富士駐屯地）に所在する隊員数千名余やその家族の診療並びに東・北富士の両演習場で訓練する東部及び中部方面隊並びに長官直轄部隊等の隊員の緊急医療に多大の貢献を果たしてきた。

富士病院は、全国各地に展開配置されている陸海空三自衛隊の共同機関として15個ある自衛隊病院の一つであり、ベッド数50床の規模的には小規模の病院である。現在病院長以下、医官（歯科医官含む）10名、看護官（一般病院で云う所の看護婦）37名、検査・X線技師各3名、歯科技工士1名、薬剤官3名、その他管理に任ずる総務、給食、資材、医事等32名の総員90名である。

年間の外来患者数（隊員）は、約28,000名であり、平均1日外来者数は110名で、診療科としては、訓練の厳しさを反映してか、入院患者数で見ると、整形外科が圧倒的に多い。しかし、成人病検診の結果により入院するものも小生みたいにかなりの数に上る。このように、自衛隊の健康管理システムは整っているもので有り難いことだ。

平均在院日数は6日、ベッド利用率は50%である。平均在院日数が6日というのは驚異的な数字なのだそうだ。早期入院、早期退院が望ましい。しかし、逆に患者の回転が速いということは、洗濯等の管理に任ずる人は大変なのだそうだ。入院者の準備に大童どとか。

当富士病院は、演習部隊等の隊員に対して一次救急を施し、第一線たる部隊に復帰させ、重傷者は自衛隊中央病院に転院させると云う言わば、野戦病院的な地位付けにあると言えよう。（看護課長の言）

小山町長からの永年の要望であった富士病院の保険医療機関化即ち病院の一般開放が、平成12年度初頭から実施され、須走の住民に感謝されている。特に2次救急と近くで通院しやすいこと等で喜ばれている。

このような富士病院の地位の高まりに応じ、最新鋭の医療・検査機器が配備され始めた。自衛隊中央病院の医官と音声と画像を双方で確認しながら情報交換が出来る遠隔地医療支援システムは、この規模の病院としては早い時期に導入されたといっているだろう。

また、CTも大いに活用され、より迅速で正確な検査が出来る。今後も富士病院には最新鋭機器が導入され、富士地区の医療も画期的に素晴らしくなるのだろう。

富士病院の自慢を聞きました。

- ① 看護婦が若くて揃いも揃って美人！他の病院と比べて下さい。
確認してみたら。結婚している看護婦も多いので、念の為。何故か、戦車教導隊の隊員と結婚している者が多いのだそうだ。
- ② 若いのは看護婦ばかりではない、働き盛りで仕事一筋の燃え滾る先生が揃っている。
- ③ 皆が異口同音に言うのは、富士病院の病院食は美味しいという事だ。患者さんに早く直って貰いたいという栄養士さんや給食係の心が籠もっているからであろう。料理長はどこかの有名レストラン仕込みの腕前、他の給食係も確かな腕前で、レストランを開業出来る位の力量あるとの噂も有るほどだ。真偽の程不明。
- ④ もう一つの自慢は、3階にある病室（西側）から富士山を望む事が出来るということだろう。霊峰富士をベッドから眺められるということは、何よりの治療でなくて何であろうか。富士山に癒され、富士山からエネルギーを貰って快復も早かろう。
- ⑤ 富士病院は、健康管理室を設け、隊員や家族の健康管理相談を積極的に行っている。また、富士駐屯地修親会発行の「富士」記事にも健康シリーズを連載している。

(了)